

「震災復興・地域経済再建・ 神戸製鋼の社会的責任を問うシンポジウム」

今、住民自身が「復興は、これでよいのか？」被災地での課題を問い直す時

10月15日、神戸市内で開かれた「シンポジウム」では、地元の「大企業」の社会的責任について、それぞれの専門家が、市民の立場で発言されました。内容は現時点の問題点を浮き彫りにし、神戸の街づくりを市民が考えていく上で大きな示唆を与えてくれるものでした。主な内容は次のとおりです。

① 都心部建設予定の火力発電所について

震災復興の都心部に、今なぜ「火力発電」なのか？その訳を聞くうちに、市民の環境・健康を犠牲にした企業の目先の利益優先の実態が明らかになってきました。火力発電所ができる事で、いかに大気汚染をより悪化させることになるか、全国と神戸市の児童の喘息患者数の比較資料を下に説明されました。現在でも極端に神戸市は「児童の喘息患者数」が突出し、増加の傾向があります。行政はその改善努力をしなければならない

のに、市と企業が交わしている「環境保全協定」の基準では、守れる保障のないことが説明されました。その他、温暖化を促進する大量の二酸化炭素排出による環境破壊は、世界のエネルギー問題解決の方向とはっきり逆行するものです。21世紀の神戸の街を考えると、再生可能な自然にやさしい新エネルギー開発の道を考える時が来ているのではと思いました。

② 東部新都心「HATこうべ」開発問題

兵庫県や神戸市は「災害復興公営住宅地」を大企業の土地に求めました。震災前は「企業の遊休地」として空き地だった所を、行政が「震災復興」の大義名分で大企業から高く買い取ったため、元の街の再生ではなく、大規模開発の街づくり（スクラップ・アンド・ビルド型の街づくり）が進んでいる事が報告されました。

いつのまにか、企業に公的資金が使われ、震災を契機に復興してきた実態を聞き、改めて住民がなかなか元の街に戻れない訳がわかりました。そして、改めて『住民個人へ公的支援』をする事が、『暮らしを再建し地域の活性化』につながる事を思い知りました。



③ 企業の社会的責任を問うために。

フロアから、神鋼で働いていた方が、差別的な労働実態を訴えられました。その事も含めて、シンポジストから、①②のように地元の大企業でありながら住民への多大な問題を抱えている根本に、

「会社経営陣と総会屋との癒着」が報告されました。企業の社会的責任を問うために、「株主オンブズマン」として、市民による監視を呼びかけました。

最後に、神戸製鋼所が地元住民の安心と安全を重視する企業になる事に期待して、今後も粘り強く「社会的責任を問う」行動をしていく事を確認しました。

被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆

第16号 2000・10・17



全教神戸市教職員組合「絆編集係」
神戸市中央区下山手通
4・13・9中尾ビル3F
TEL-078-391-7508
FAX-078-391-8549
〒振込口座番号 01170-7-29732

緊急レポート (三宅島・北海道・神戸)

東京の谷田川先生から、三宅島の子ども達、先生の「疎開先」での様子が、北海道に行かれた神戸の中塚先生から、現地の状況が寄せられました。それぞれの「被災地真っ只中」の様子をお知らせします。そして神戸では・・・。

被災地「三宅」の子どもたちはいま

「夜勤明けからそのまま授業にむかう」と語る棒先生

谷田川 和夫

放課後のひとときをたのしむ

子どもたちの姿にほっとしながらも

秋川高校での放課後のひととき。入浴の始まった子どももいる。バドミントン、キャッチボール、バレーボールなどに興じる子どもたちの声が明るい。カメラを構えて木立に入ったら、「その近くスズメバチがいるから気をつけて」と中学生。その明るい声にほっとするが、ここでの生活に「慣れる」ことは、先行き不透明な避難生活が延びる不安でもある。みんな一日も早く三宅へ帰りたいがっている。

しかし、いまは闇のなかだ。どんなに慣れてもここには、子どもたちの日常はない。漁から帰る父親を迎えに浜辺に自転車を走らせるような…。ここでは、放課後の外出は高校生だけに許されている。

秋川駅周辺に繰り出す。スーパー「東急」を見飽きても、行き先はそこしかない。塾のない三宅で育った子たちは、自然と人間がともだちだった。ここへきて、ほかにすることもないから勉強でもしようかな、という子もいると棒先生は苦笑する。



11月6日「再生エネルギー先進国デンマークに学ぶ」神戸市生涯学習支援センター開場 pm6:00～

11月10日「神鋼包囲総行動」岩屋公園（阪神西灘駅南西）pm6:15～

縦割り共同生活の貴重な体験も 長期化のなかで困難さも増して

校内での完全縦割り集団生活のなかで、子どもたちは逞しく貴重な体験をつんでいる。「三宅」を訪ねる人は「みんな協力して、助け合い、頑張って」と言うが、ことはそれほど簡単ではない。

完全縦割り集団で、小学生は一年生から六年生までが共同生活を営む。

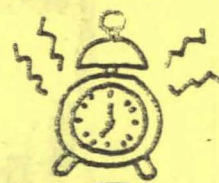
掃除、洗濯、食事など上級生がじつによく下級生の面倒をみている。洗濯など上級生といっても、自分の物さえ親まかせの生活をしてきた子どもたちだ。

ストレスからくる発熱など体調不良を訴える子も少なくない。夜泣きする子は低学年が多い。隣で寝ている子は上級生に助けを求める。上級生も度重なればつらくなってくる。

こんな生活が長期化すれば、「頑張り」にも限界がやってくることは必至だ。逆にエネルギーを持て余す中・高生が夜遅くまで廊下でドタバタ騒いで叱られることも多い。毎日が「林間学校」だ。

二泊三日程度なら教師も対応できるが、すでに長期化したなかで、教師の体力は限界にきている。なにしろ、夜が明ければ授業が待っているのだ。

勤務時間は変則午前八時から午後五時までなので、休憩・休息の時間は途中で確保しなければならない。給食時間の子どもたちの様子も気になるが、とてもそこまでは把握できない。



舎監業務は切り離して、 早く増員を

子どもたちの生活の指導・管理は中・高校は各フロアで一人、小学生は各校（三校）から一人ずつが交代であたっている。秋川高校は現在数十名の在籍だが、生徒数が多かったころの宿泊施設が残っていたので、四〇〇名ほどの三宅の子たちの宿泊に、教室を転用するなどという事態ではない。

しかし、高校生、しかも男子校向けに建設された建物に、小学一年生から入るという問題点は、当初からマスコミでも指摘していたが、いまだに改善されていない。

たとえば、女子が部屋にカーテンがないので、「東京は怖いからカーテンをつけてほしい」ともらしていた。たまたま備わっていた男子の部屋からはずして持ってきて、間に合わせているところもあるが解決にはほど遠い。

不備な施設の中で生活し、学ぶ子どもたちにどんな問題が起こるか、毎日が初体験、未知の世界との格闘だ。

教師も子ども達も限界

教職員たちの住まいも最近、ようやく近隣の市営住宅などが確保されたが、自分の生活環境を整備する間もない。小学校は夜勤のサイクルも早く、三、四日に一回まわってくる。

夜勤明けからそのまま授業に向かうことは珍しくない。せめて、舎監業務を教師から切り離してほしいと要求したが、教委は「それも教育活動だから、安易な委託はできない」という。

最近、その方針に変化がみられるようになったが、教師たち、もちろん子どもたちの頑張りや、体力も限界にきている。

皆無の教材、 綱渡りのような授業

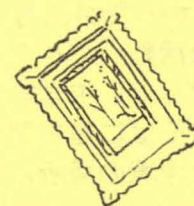
小学三校、中学三校、高校一校が同じ建物で生活し授業する。とりあえず安全のために避難ぐらしをするという事態ではない。子ども達はその「とりあえず」の物を持って秋川へ来た。

三宅では進度も学習も違っていた子どもたちが、特別教室など他のクラスの都合と調整しあって使う。しかも教材は皆無といっている。

写生をしたくても画材がないので、教委に申し出たら、あるPTAが動いてくださって、ある日、どっと「救援物資」が届いた。トラック一台の画材だ。図工室へ運ぶのにボランティアを動員して汗だくの作業だったという。

画板がないので隣の西中から借りる、返す、また借りるの大変さを体験したクラスの先生が、「画板がほしい、などと言わないでよかった。トラック一台も運ばれたら大変」と言っていた。

市内全域の学校に呼びかけて衣類と布団の拠出を求めている所があると聞いたが、置き場所もない。



不安解消、急いで

島はどうなっただろう、自分の家は。みんなテレビ、新聞以外の情報はなく、携帯電話も発信源の施設が機能せず、情報不足でいらいらしている。

先日、三宅残留の警察官が強いガスのため倒れたという情報が入った。同様な任務で残留している親をもつ子の不安は大きいのが確かめようもない。現金収入の途絶えた親の苦労にも気づいている。

「みんなが一緒にいる」ということに支えられて頑張る子どもたちに支援の手を、と願う。

現地の先生の疲労を思っ、取材はなるべく遠慮してほしいと忠告をうけながら、少しでも見てから報告したいと思って、出かけた。快く対応してくださった棒先生はじめ先生たちに心から感謝したい。

お元気で。

(共同研究者)



子どもたちと共に健闘する
棒先生

(東京民研発行「子どもと生きる」より)

全教神戸では、引き続き被災地と連絡を取りながら、必要な支援活動を行います。皆様のご協力をよろしくお願いします。

「被災地支援活動のためのカンパ」のお願い
全教神戸市教職員組合書記局
〒振込口座番号01170-7-29732
名義（

北海道有珠山噴火被災地訪問

全教神戸被災地訪問有志の会 (こうべ小学校 中塚 和代)

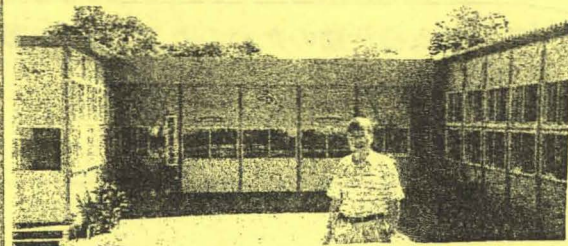
全教神戸の教育復興担当教員(以下復興担)を中心に、5名の訪問団は、8月26日(土)27日(日)両日、有珠山噴火で被災された方たちを見舞い、励まそうと虻田町の温泉街を訪問しました。現地の教師、S氏の紹介で多くの方に会うことができました。町民の方々や学校の先生方と懇談し、噴煙やまぬ町の不安な暮らしや、泥流が押し寄せ、立ち入り禁止となった学校の様子などを詳しく聞くことができました。神戸からは震災体験を通して見えてきた教育の本質や子ども達のがんばりを伝え、心の健康回復や町の復興のあり方について交流しました。

被災の今

たしかに緊急火山情報が噴火前に出されたことにより、人的被害を出さずに住民の避難を可能にしました。伊達市、虻田町、壮瞥町に出されていた避難指示はマグマ活動の低下に伴い、順次解除されています。8月11日現在、虻田町の一部地域202世帯のみとなり、避難所は全部閉鎖。仮設住宅での暮らしが始まっています。一時は、電気・ガス・水道・電話・鉄道等のライフラインが機能を停止し、降灰と地震・熱泥流の中で不安な日を過ごしました。今も上る白い噴煙が、自然の恐ろしさを十分に感じさせてくれます。

学校は泥流が大量に流れ込み、火口からも近いので入ることもできません。噴火の心配のない街から離れた所に仮の校舎が作られ2学期が始まっています。

子ども達の通ってくる仮設住宅は、町内に4カ所、他市町の被災地を含めて7カ所作られています。神戸で使われた物と似ていますが、4軒長屋でストーブが付いています。しかし、板の厚さは同じようです。冬に向かうこれから、冷えとの闘いが始まりそうです。



仮設校舎の前で

学校を訪ねて

街の方たちとの話し合いが、仮設の洞爺湖温泉小学校で開かれました。玄関先には長い間泥流に埋まっていた鉢植えが元気に緑を取り戻して子ども達を励ますかのように何鉢も置かれていました。4月1日現在、154名の在籍中、120人が戻って来ているそうです。しかし、自宅に戻れた子は22人で、後は、仮設住宅住まいです。スクールバスの乗車時間は、遠い子で45分もかかります。



通学バスで通う子ども達

1学期には4カ所の仮住まい生活で、行事らしいことはできなかったが、2学期には少しでも例年のような活動ができるよう計画されているとの事でした。中学校や街のコミュニティゾーンのそばに建ち湖面がどこからでも見えるよい環境の場所にありました。

校舎の内装はコンパネで、上等とは言えませんが、総板張りで木のおいがいっぱい。壁面には全国からの励ましのメッセージがきちんと整理されて、美しく、たくさん張られていました。神戸市の子ども達を見つけた時には、神戸の子ども達と先生方の温かさに改めて感動しました。

町民の方々との懇談会

終息宣言の出ていない町での観光産業のたてなおしには、あまりにも課題が大きいことが話されました。行政ペースやホテルの意向に押し切られないで、住民の考えを大切に、町の復興を進めようと語り合われました。

私たちは震災体験で改めて気づかされた人間の強さやがんばり、やさしさを伝えました。噴火を逆手にとって安全な町づくりに取り組み「火山が学べる」を呼び物にして、町が再びよみがえる道を支援して行かねばと思いました。ホテルの各部屋では、ヘルメットが備え付けられ、お客さんで町が賑わう日が待たれます。

FM、レイクトピアに生出演

虻田町災害 FM 放送局「子ども達に聞かせたい、神戸の震災と立ち上がる子ども達」に呼ばれ、神戸の被災の状況、避難所の運営、父母を助けた子ども達、気づいてやりたい心の傷とその信号などについて、神戸からのメッセージをていねいに伝えてきました。番組終了前にもリスナーから感想が寄せられ、企画に少しは答えられたかなと、安堵しました。

被災住民に確かな情報が提供されているという町の人々の努力に拍手を送り、組合員の仲間から訪問団に寄せられたカンパと色紙を渡しました。(S先生は、この放送を支えている一人です。)紙芝居の「神戸のなおちゃん」もスタッフの小学生にプレゼント。

アクセスしよう→URL[<http://www.usuzan.net>][<http://www.usuzan.net/onshou>]

Eメール onsho@educet.plala.or.jp

「県独自の公的支援を」鳥取西部地震で、鳥取県知事発言。

10月6日の鳥取西部地震(M7.3)は、阪神間被災地の多くの人に、忘れていた「大地震」を呼び起こすものでした。被災地鳥取では被災から10日以上が過ぎた今、新たな動きが見られます。阪神・淡路大震災を機に成立した「被災者生活再建支援法」が、実際は「収入制限が厳しく、支援を受けられない」との失望の声が上がっていることを受けて、鳥取県知事は、『県独自の制度として「被災者の公的支援」を検討する。』と発表しました。展望の持てる実質的な「個人補償による生活支援」の実現が待たれます。

北海道教組役員と交流

当地で学習会を開いていた委員の方たちと、子ども達への支援について交流しました。全教の先頭にたって、被災地支援に取り組んでいる道教組に兵庫教組のみなさんから寄せられていたカンパや紙芝居も届けました。

終わりに

焼物にする粘土のような火山灰の除泥に、この日も180人のボランティアさんが、各地から来られていました。かつて、神戸へ寄せられた多くの熱い心を、今、それぞれの立場、形で、被災地をはじめ全国の防災体制づくりに向かって発信する時だと思います。

私たちは震災被災の当事者として、神戸での教訓が行政の援助においても、個々の人々のサポートの場合にも活かされ充実させていっているかに関心を寄せていく必要があると思います。

復興担当教員もその一役を担っていきたいと思います。



地元の方々と懇談

今、子ども達の居場所づくりに
楽しいとりくみが広がっています。

みんなで楽しくお芝居あそび

—震災から生まれた私たちの新しい試み—



ワークショップを楽しむ子ども達(1)

人とおとな数人、そこに劇団員三人が入り、七日間、ゲームを通してお互いを知り、体をふれ合い、イメージの世界を遊び、表現する楽しさを味わった。

見ず知らずの子どもたち同士、初めは手もつなげず、目も合わせなかったが日を追う毎に声が出るようになり、表情が豊かになり、自分を主張し出す。

ワークに関係なく皆の周りを走りまわり、一見邪魔をしているようにしか見えない子も気がつくゲームの先頭にいたりする。

参加した子どもの中には、普段クラスの中でコミュニケーションがとりにくいと言われた子も不登校気味の子もいたが、どの子もそれぞれ個性を持った子どもたちの一人だった。

このとりくみのきっかけとなったのは震災一年後から始まったシアターワークスの活動だった。震災でそれまでのコミュニケーションがこわれてしまった被災地で「演劇が役立つことがあるのではないか」という演劇評論家、衛紀生氏の呼びかけに、演劇人、カウンセラー、ボランティアグループ、ミュージシャン等、様々な立場の人たちが集った。

私たちは、活動を共にしてきたプロの劇団、音楽団体からの「子どもたちが元気になるよう何かお手伝いしたい」との申し出を受けて

避難所、校庭の片隅、公園など、約一〇〇カ所で行形劇、舞台劇、大道芸などの公演の場をつくってきた。この「がんばれ子どもたち応援隊」の経験から、衛氏の呼びかけに共感し、私たちも参加することにした。

「演劇はコミュニケーションのアートです。人間サイズの営みだと私たちは考えます。衣装の色ひとつ決めるにも、言葉一つ紡ぐのにも、多くの時間を語り合い、理解し合うことを必要とします。」

演劇は人間の健全な営みを取り戻すための、だからとても有効なコミュニケーションツールです。(中略)

私たちはいま、災害のあとの心と心の健全な営みのために、演劇という『一本の樹』を神戸にたてようと思うのです。」

—シアターワークス企画書より—

集った人たちがそれぞれの立場から何ができるのか話し合いを重ね、実施された活動の一つがキッズワークショップだった。

震災という厳しい体験を余儀なくされた子どもたちの心と体をほぐし、自分を出せる場をつくろうと始まった。尼崎、神戸で計五地域の子どもたちを対象に、月二回、定期的に

行われ、それは三年間続いた。

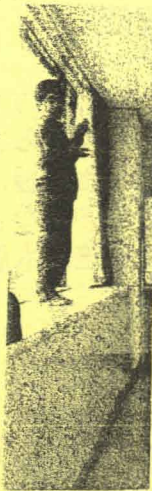
子どもたちそれぞれが自分のやりたい役を出し合ってそれをもとお芝居の台本づくりを何ヶ月もかかってやるところ、とにかく体を思いっきり動かしたいと、時間のほとんどを体力勝負の遊びにかけていたところ、役者の基礎的な訓練のメソッドに沿って表現活動までとくりくんだところ、など、参加する子どもたちの個性、まわりの環境、かわる演劇人のやり方等で中身は様々だった。

一回ワークが終わる度に子どもたちの様子を思い起こしながら、カウンセラーに入ってもらって話し合った。

かわるおとなが専門性をもって真剣に向き合い、強制しない、じっくり待つ、一人一人の発言や動きを尊重するなど、共通の認識を持つて取り組むことで、子どもたちにとって自分をそのまま出せる、安心していられる場となっていたようだ。

三年間、このキッズワークショップのスタッフとして立ち合ってきた私たちは、「こんな居場所をどこの地域の子どもたちにも欲しい」と感じた。

この貴重な経験を私たちのこれからの活動が引き継いでいくことでシアターワークスは昨年、ヒリオドを打った。



そしてこの春、「みんなで楽しく…」が実現した。今回は財団からの助成を受け、県立劇団である「ピッコロ劇団」の協力を得ての取り組みだった。若い劇団員たちは日頃の役者修行で身につけた一〇〇を超えるゲームの中から、子どもたちのノリ具合、達成度を見ながら組み合わせ一日のプログラムをつくっている。

緊張を解く、相手を感じる、自分を表現する、感じたことを表現する、集団で創造する。体を動かす、声を出し、楽しんでいこうにたつた七日間でこの難しい課題を見事にやってしまった。周りのおとなはそのことに感動するが、子どもたちはただ遊んでいるだけなのだ。

こんな居場所が各地に欲しい、イベント的でなく子どもたちの生活の中に欲しい、さらに発展させて芝居づくりができれば…と夢は膨らむ。

NPO法人兵庫県子ども文化振興協会

天野 光子



ワークショップを楽しむ子ども達(2)

私は、シアターゲームに参加して、すごくよかったなあ—と思いました。それは「こうちゃん」たちも、とてもやさしくておもしろかったし、いろんな人というんなゲームをして、とても楽しかったです。

七日間のうち二日間は、いけなかったけど、やっぱりすごくおもしろかったです。そして、ゲームが終わったら、すごく汗をかいていました。

小六 下里 陽子

サメサメゲームと海外かん光りようとうと一人が目をむいて、ゆびを一本であやつるゲームが楽しかったです。はじめは一人もお友だちがいなかったけど、いっぱいゲームをしたら、ふしぎなことにみんなの名前がおぼえられたし、友だちもとてもたくさんできたから、毎日いややなと思うこともなく、はなたいに、はやくいく時間にならんかなと、いつも待っていました。

今日はどんなゲームするかな。楽しいことをたくさんやりたいな—と思いながら毎日楽しく通っていました。

小二 ふじ川 なぎさ

「子ども達の豊かな環境づくり」を支援します。

連絡先 「兵庫県子ども文化振興協会」

〒650-0024 神戸市中央区海岸通2-3-11 昭和ビル2F (TEL・FAX 078-331-9859)